

(over-belief)」という概念をもって許容される。「過剰信念」とは、宗教の共通項を越えた、各個人が持つ特定の信仰を意味し、それは生きた信仰のためには不可欠だという。つまり実際の宗教生活では、信仰の対象はそれぞれ具体的な姿を取るべきであり、ここには伝統的有神論も含まれるはずである。

過剰信念を許容するためには、先述のように信念を変化するものと捉えることが必要である。ジェイムズは、宗教的仮説を信じて生活していくことが検証であり、その結果その仮説はより確かなものになっていくと考えた。科学理論が様々な修正を受け、変容しつつも維持されていくように、宗教的仮説も、プラグマティックな検証を受けつつ肝心な「過剰性」を維持することは不可能ではないだろう。

信念が可塑的なものであり、絶えざる検証の中にあるというプラグマティズムの世界観を前提とするならば、「信じたいものを何でも」信じるのではないことを担保しつつ、信じる意志のテーゼをあらゆる宗教の場面に適用することも可能と思われるのである。

ヤスパースの「未来における信仰」について

藤田 俊輔

ヤスパースは、前期の『現代の精神的状況』(一九三一年)を嚆矢として、後期の『歴史の根源と目標』(一九四九年)および『原子爆弾と人間の未来』(一九五八年)において現代論を展開している。こうした現代論において未来の問題が扱われる際には「覚醒的予断(erweckende Prognose)」という立場

がとられるが、これは我々の可能性を開くことにより諸々の計画や行為の出発点を与え、我々を最も広い地平へと連れ出すことにより我々の自由を高める予断である。換言すれば、覚醒的予断とは「我々の現在の意識」を高めるものに他ならない。

ヤスパースによれば、我々がどのように信じ、また何を信じるかという問いこそが未来に対する本来的な問いであり、その他のあらゆる諸問題を制約し包み込んでいく問いである。つまり、未来の諸問題は信仰によって担われるのでなければならぬ。ここに、現在の信仰を導く「未来における信仰」の問題が生じてくる。無論、この考察の立場はヤスパースの「哲学的信仰(der philosophische Glaube)」によるものではあるが、しかし「未来における信仰」の問題自体は宗教的信仰においても共有されるべきものとして考えられている点が重要である。そこで本発表は、この問題が最も明瞭な形で提起されている『歴史の根源と目標』を主な参照軸とすることにより、「未来における信仰」というヴィジョンの輪郭を示すことを試みたい。

考察の手順としては、まず「未来における信仰」が問題となってくる背景を確定すべく、「枢軸時代(Achsenzeit)」を中心とした「世界史の図式(Schema der Weltgeschichte)」を確認し、その図式が現在と未来に対して持つ意義を提示する。

この図式の展開によって、ヤスパースは現代の危機を人類に普遍的なものとして意識させ、その危機を好機へと転換させようとする。ヤスパースは現代的危機の根本に信仰喪失を見ており、そこからの転換を図るべく「未来における信仰」の在り方を提起し、第二の枢軸時代に向けて現代人の意識を変革させよ

うと試みるのである。

次に、「科学的―技術的時代」として規定される現代の危機を、ヤスパースの科学技術論に即して明らかにし、それに伴って大衆とニヒリズムの問題とこれらの根底に存する信仰喪失の問題を指摘する。この信仰喪失という危機によって、現在の信仰を導く「未来における信仰」の問題が切実なものとして浮かび上がってくる。

最後に、信仰喪失の危機にある現代において、「未来における信仰」というヴィジョンが哲学的信仰ならびに宗教的信仰に対してどのような訴えかけを持つのかを明らかにする。ヤスパースはこの訴えかけにより、あらゆる信仰が枢軸時代以来の伝統に関わりつつ自らの根源を取り戻し、また科学技術による「地球の統一」を地盤として「人類の統一」へと、すなわち「第二の枢軸時代」へと向かい得る空間を指示しようとしたのである。

以上の諸考察により、「未来における信仰」というヴィジョンが、哲学的信仰や宗教的信仰といったあらゆる信仰に対して何ら確実な答えを与えないものではないにせよ、それらの信仰を未来の問いへと引き込み、「我々の現在の意識」を交わりの中で高めるよう作用し続けるものであることが明らかにされる。ここでは輪郭のみが示されたに過ぎないが、このヴィジョンは『啓示に面しての哲学的信仰』（一九六二年）を頂点とする後期の著作群を手掛かりとすることで、より詳細に論究され得るであろう。

フランツ・ローゼンツヴァイクの思想における祈りの問題

丸山 空大

「祈り」はローゼンツヴァイクにとつて常に重要なテーマであったが、欧米の研究でもこれまでほとんど注目されることは無かった。これは、ローゼンツヴァイクが祈りに重要性を見出しつつも、特に術語として体系的に論じようとしたわけではなかったためであろう。彼にとつて祈りとは神と人間とのコミュニケーションのあり方の一つであり、自身の神理解や人間理解と関係する限りで重要であった。このため、同時代人のハイラーが行ったような包括的で一般的な研究を彼が行うことはなかった。

ローゼンツヴァイク自身が振り返るところによれば、彼は友人の影響で宗教についての相対主義的な見方を捨てて、人間の生における宗教の問題の重要性を認めるようになった。その際、彼はいちどキリスト教に改宗することを決意するが、撤回しユダヤ人として生きる。この改宗劇については、これまでいくつかの背景が指摘されてきたが真相ははっきりしていない。とはいえ、これを機に彼がユダヤ教の伝統と正面から向き合う必要が生じたことは間違いない。キリスト教に改宗する決断をしたということは、一度は彼が知る限りでの当時のユダヤ教に不足を感じていたということである。このため、そこから改めてユダヤ人として生きることを決断したとき、彼は自身の要求に合うユダヤ教を再構成してゆく必要があった。彼の祈りについての関心もここから生じ、このため、当初祈りはユダヤ教全体との関係の中で、とりわけそれが唱えられる儀礼との関係の